

展望	1	公開月例研究会講演記録〈第 254 回〉(2010.6.22)	19
公開月例研究会講演記録〈第 252 回〉(2010.5.19)	2	産研だより	34
公開月例研究会講演記録〈第 253 回〉(2010.6.8)	11		

## 公開月例研究会講演記録〈第 252 回 (2010. 5. 19)〉

### わが社の経営理念と経営ビジョン

株式会社 FVP 代表取締役

大塚 由紀子

皆さん、こんばんは大塚です。

私は日本大学の文理学部哲学科を 20 年余り前に卒業しましたので、多分お母さんやお父さんと同じぐらいの歳です。私が社会に出る前後は正にバブル期でした。

大学は皆さんと同じ日本大学です。不真面目な学生をやっております、今は会社を経営しています。会社を作ろうなどと思ったことは一度もありません。実はバンドをやっていたので、「ミュージシャンになろう。大学を中退して、この武道館でライブをやろう」というのが入学式のときの私の目標でした。それぐらい不真面目を絵に描いたような大学生でした。

哲学科ですので頭でっかちでいろいろなことを、「こうあるべきである」、「なぜそうなのだろう」などとよく考えたりはしたのですが、経済や経営ということを心の底では毛嫌いしていました。本当は数学が苦手だったからだと思いますが、哲学科を自分で選びました。その挙げ句、私は会社を経営し、結果は全て数字に現れてくる世界の中で仕事をしているわけで、人間、嫌がれば嫌がるほどそれが追いかけてくるということ、社会に出て 20 年経って感じております。

今日皆さんにどのような話をしているかわかりませんので、私の大学時代の懺悔を先にさせていただきます、皆さんの方が真面目だということをお伝えした上で、お話に入りたいと思っています。実際、今の学生さんの方が私のころよりずっと真面目で、私共の会社にインターンで来てくれる学生達も本当に真面目です。

大学のとき、私は一体何を考えていたのだろうかと思うのですが、結局社会というのはそういうものなのですね。用意された答えを誰かに教えてもらうために勉強するのではなく、何が問題かを見つけ、その答えを自分で探していく。その力を学ぶための場所が大学だったということに、大学を卒業し数年経って気付きました。

皆さんもそれに早く気付けば大学時代はもっと面白いだろうと思いますが、多分、分かりません。だからいっぱい悩めばいい。自分は何、幸せって何、人の役に立つのは本当に気持ちがいいことなのか、何のために生まれて、どこに行こうとしているのかなど、40 歳になった私も未だに悩んでいます。そんなこと簡単に分かりません。いろいろ悩み、悲しみ、時には喜んだりもすればいい。それが人間だと思っています。

私が今日皆さんに話すことは、これから皆さんが人生を歩んでいく中でどの程度役に立つかどうか分かりません。経済学部の皆さんは、多分就職される所は企業ですし、ビジネスシーンでお仕事をされていくと思いますが、私のお話は障害者雇用の問題が中心になりますので、直接的にはあまり役に立たないかもしれません。しかし、経営とは何か、社会とは何か、会社で働くとは何か、そもそも人が働くとは何か、などを考えていく際の情報の 1 つとして、聞いていただきたいと思います。

小学校や中学校のとき、クラスに障害をもった友達がいたという方、その人とまだ付き合っていますか。クラスにいたけれど、いつの間にかいな

くなりましたね。私も、小学校の低学年ぐらいまでは、特別学級があり、図工の時間や体育の時間だけ一緒に勉強した記憶があります。ところが、中学に進み、高校から大学に行って社会に出て、一緒の歳だから一緒に大人になっているはずですが、その間、彼女や彼らと一切接触もなく、何の関心もなく生きてきました。

大学時代、社会福祉とかいうのはダサイと思っていました。バブル期で、金融や外資、広告などが一番人気で、福祉や医療は学生に人気のない分野でした。そのような価値観が蔓延している時代で、今このような仕事をしている私も、30歳過ぎまで障害のある人や福祉などには全く関心がありませんでした。社会に出て一緒に仕事をしている同僚から、「ぼくの弟は知的障害があって、多摩にある施設に入っている。月に1回、家族と一緒に車で会ってくる」という話を聞くと、「お気の毒に。」と思っていました。

これは1つの例で、立派な施設が全国各地に造られています。障害を持った人達はかわいそうだから、福祉で一生面倒を見なければいけない。お父さん、お母さん、家族の人達も苦勞するから、こういう所で預かってあげます。皆さんは安心して生活してください。障害のある人達も、地域の中にいるといじめや差別され、無理解な人達の偏見にもさらされてかわいそうなので、ここで特別に保護しますということで、こういう箱ものと言われる施設が特に山の中などに作られています。昔ほどではないですが、多いときには1施設に1億円ぐらい毎年使われ、その箱ものに障害のある人達が収容されて、一生ここで生活するというような世界でした。

彼らは大人になった後、何をしているかという、あの立派な施設の中で仕事をしています。ネジを止めたり外したりするような作業をしている風景です。

牛乳パックをリサイクルして和紙を作り、それで葉書を作ったり、布巾に手縫いで刺繍をしたり、藍染めでコースターを作ったり、クッキーやパンも作っています。

作った物をチャリティーバザーで売って稼ぎます。皆さん、知らなかったでしょう。私も30歳つになるまで全く知りませんでした。知ってしまったらショックで、私は今この仕事をしている

のです。

私は大学時代、「就職なんて嫌だ。会社に入って歯車の1つになって働くなんてとんでもない。できれば働きたくないし、働くとしても、それはミュージシャンになって自分を表現していくことだ」と本気で思っていました。

ところが、障害者の方達の多くは、働くか働かないかを自分の選択肢として選べない。いわゆる知的障害者という知的なハンディキャップのある人達の約6割は、先生や親御さんから「あなたは福祉でお世話になるのが幸せだから、そこへ行きなさい」といって進路を決められてしまう。全国で20万人ぐらいの方達が先ほどご覧いただいたような立派な施設に入れられて、就職してその施設を出る人は100人に1人ぐらいです。ほとんどの方は、あのコンクリートの中で毎日単純作業をして、一生を過ごします。

しかも、その方々が一生懸命作業をして、できた物をバザーで売って収入を得ておられますが、その工賃は月に1万円です。我々がアルバイトをすると時給1000円ぐらい貰えますが、彼らは生産活動による平均所得が月に1万円です。障害者年金を月に6万6000円ぐらいもらっていますが、合わせても7万6000円ですから、暮らせない。10万円いかない収入で1人で暮らしていくことは絶対無理ですから、親がかりか、施設で一生面倒をみてもらうことになります。

その現状を初めて知ったとき、私はショックでした。もし自分がこの日本という国に障害を持って生まれたというだけで、自分のやりたいことにチャレンジする機会がなかったらいやだと思ったのです。進路を考えると、ミュージシャンになりたいとか、外交官になりたいとか、玉の輿に乗りたいたとか、なれるなれないということではなく、チャレンジする機会が与えられていないことは嫌だと思ったのです。

それは福祉のことや障害のある人達にかかわってきた経験が多少あったからではなく、単純に「それっておかしくない？少なくとも私は嫌だ」と思いました。

10年ぐらい前、ヤマト運輸の社長をされていた小倉昌男さんにご縁をいただきまして、「大塚さん、福祉の施設で働いている人達が20万人ぐらいいて、彼らの月給がたった1万円なんだよ、

おかしいと思わないかい。それは障害のある人達が障害があるから給料が安いのではなくて、仕組みがなっとらん。経営のところがうまくいっていないんだ」と言われました。

最初小倉さんのおっしゃる意味が分からなかったのですが、先ほどご覧いただいた作業風景を見て分かりました。要は経済活動の仕組みの中に彼らのお仕事が入って行ってないのです。今は東南アジアに行ってしまったような付加価値の低い内職仕事や、大量生産のできない藍染めのコースターとか手漉き和紙の葉書を作っている。市場の流通にとっても乗せられないですし、仮に乗せたとしても、幾らで売れますか、大量注文が来たときに応じられますか。手作りで機械を使っていないので、一定以上の量はできませんし、同じ品質のものを作り続けることも難しい。売っているのも年に3回のチャリティーバザーだけですということですから、市場経済の仕組みに乗っかっていない訳です。これでは得られる収入が多くなるはずがない。彼らの働く力が劣っているのではなくて、要は仕組みの問題です。

小倉さんは素晴らしい経営者で、「経営者の尊敬する経営者」のトップ10に必ず入ってくる有名な方ですけれども、その小倉さんが「ぼくは福祉のことは分からないけれども、経営者は長くやってきたから経営のことを福祉の人達に教えてあげたい」ということで、セミナーを始められました。私は経営コンサルタントが元々の職業で、今もやっていますが、ありがたいことに「一緒にやろう」と言っていたので、小倉さんと一緒にそのセミナーで、福祉の人達に経営の基本みたいなことを教えて差し上げるお手伝いをさせていただくことになりました。

私自身、大学時代、できれば働きたくなかったし、組織の中に自分の居場所とか可能性を引き出してくれる場所があるような気がしませんでした。だからミュージシャンになりたいと思いがら、それでも食べていくために仕方なく社会に出て仕事をしていく中で、いろいろな人と出会い、失敗も重ね、少しずつ仕事に責任も持てるようになり、友達や初めて会った方に「私はこういう仕事をやっています」と話ができるようになったのは30歳過ぎてからです。

ここで私が言う「仕事」というのは、どうい

会社に勤めていますということではありません。私は全日空に勤めていますとかJALに勤めていますということが自分にとっての居場所だと考えると、寂しいと思います。例えば、JALが行け行けどんどのときは誇りであっても、今のような状態になったときに、JALの名刺を出して「私はJALに勤めています」というのは寂しい。JALが自分の誇りだったりすると寂しいけれども、「自分は日本の空を支えている仕事をしている1人です」と言えるようになると、人間は面白いなということに気付いたのは30歳過ぎてからです。今から思うと、学生時代、働きたくない、就職なんかしたくない、働くことに何の意味があるのかと悶々としていたのが、やっとそのシナプスがつながったのが30歳過ぎてからだったのだと思います。

そのプロセスの中では、特に女性の方は分かっていただけだと思いますけれども、結婚というのはとても大事でした。結婚相手によって人生は変わらなっていましたので、どんないい男と結婚するか。「3高」といって、高身長・高学歴・高所得の人と結婚すると幸せになれると思っていた時期もあります。仕事がうまくいっているときは、「私ってもしかすると凄い才能があるかもしれない。このままバリバリやって、キャリアウーマンになれるかしら」と思うし、仕事で叱られたり失敗したりすると、「会社なんか辞めて結婚でもしちゃおうか」と思う。自分の人生を考えていく上で、私ってどういう生き方をしていけばいいのだろうと、自己中心的にいろいろ悩んだりしましたけれども、障害者の方に出会ったときに大きなショックを受けました。障害のある方は、そういう悩むことさえできないわけです。

人間が100人いれば、5%から6%ぐらいの確率で障害を持つと言われてます。皆さんも、今日帰りに交通事故にあつて脳の一部が損傷して高次脳機能障害になると、今日までの自分と明日からの自分は全く違うものになります。うつ病とか統合失調症が長引くことで精神障害を起こすことがあります。統合失調症は100人に1人が青年期あるいは壮年期に発病すると言われてます。そうなると思わなくても不思議はない。

そう思っているところへ、先ほどの小倉さんに

お話を伺って、一緒にお手伝いすることになりました。幸いコンサルタントをしていましたので、福祉の現場へ行って職員の方に話を聞くと、もったいないと思うことが多々ありました。例えばクッキーも、無添加の材料を使って、有名ホテルのパーティシエに直接指導を受けて、全工程を手作りでやって、バザーで100円で売る。もしデパートの地下にあれば、間違いなく500円です。その人達の生産性が低いから100円ではなくて、付加価値の付け方によって5倍になる。経済活動の仕組みの中に上手に乗せていくことができさえすればいいわけですから、コンサルタントとしては黙って見てもらえない。いても立ってももらえない気持ちで、ついに起業してしまいました。

小倉さんはそういう発想のもとに、銀座の超一等地に「スワンベーカリー」と「スワンカフェ」という、とてもおしゃれなお店を作られました。障害のある人が働いていますとは一切書かないで、そこでパンを作り、シアトルの最高級のマシンで入れたエスプレッソを出すお店です。そこで働いている人達と、先ほどの立派な施設でお仕事をされている方々と、障害の程度は同じぐらいですが、このお店で働いている方達の月給は10万円です。FC展開されていて、今全国に30店舗ぐらいあります。

「ぼくは福祉の専門家ではないから福祉のことは分からないけれど、毎日日曜日だったらつまらないよね。障害のある人が社会に出て苦労はするかもしれないけれども、報われる苦労もあるはずだ。仲間に褒められたり感謝されたり、お客さんから喜んでもらったり、ありがたいと言ってもらったりすると、うれしいはずだ。たまの日曜日がうれしい。それは平日頑張って仕事をするからだよ。『あなたは障害があるから、1日中のんびりそこに座っていなさい。月に10万円あげるから、なんにも生産的な活動をしないでね』と言われたら、僕は嫌だよ。」

障害がある人はかわいそうだから、保護してお世話してあげましょう、苦労させないようにしましょうではなくて、究極の福祉はその人ができることを増やしてあげること。障害がある人に働く喜びを提供すること、生きがいを作り出してあげることだとぼくは思うよ。

この小倉さんの言われた事に、私も福祉の専門

家ではないけれども、大きく共感しました。

障害がある人達は毎日が日曜日です。何百カ所の施設にもご一緒させていただきましたが、パンを作ったり、クッキーを作ったり、和紙の葉書を作ったり、同じようなことばかりやっています。今全国に1万カ所ぐらいありますが、沖縄でも北海道でも、どこへ行っても同じようなことをやっていて、工賃はおしなべて月1万円です。20年前も月1万円、今も月1万円です。

それを実際に見て、「こうすればいいじゃない」というのはなんとなく思っていましたので、小倉さんの所に相談に行きました。「会社作ろうとします。月1万円を5万円にするための経営のことを勉強していただく事業をやりたいと思っています。いかがでしょうか」と申しました。「いいんじゃない?」と言ってくださると思ったら、怒られました。「そんな福祉の枠の中の小さい話ではなくて、これからはベンチャーを作れ。1万円の工賃を5倍にする作業を手伝うのもいいけれども、会社を作って、月給10万円払えるような社長をたくさん作った方が、世の中は変わるぞ。だから、福祉の所に応援しにいくのと併せて、ベンチャーを作れ。障害者の働く場を自分で作ろうとする人達を世の中に出せ」とおっしゃいました。

福祉だけの所で、あの囲われた中で頑張っている作業を活性化するだけではなくて、障害のある人もない人も一緒に働ける会社を作るような仕事をしなさいと言われました。そこで、障害者の働く場を作りたい人を応援したいという意味で、福祉とベンチャーをくっつけて「福祉ベンチャーパートナーズ」という会社名にして、今から7年前、2003年に会社を設立しました。丸7年経って、今8期目に入ったところです。

「障害者に月給10万円払えるベンチャー」、これが私共のミッションです。皆さんももし大学を卒業するときに就職が決まっていなくて、やりたいことも分からないのであれば、障害のある人に月10万円払える会社のベンチャーとして、社会起業家になって活躍していただけるのなら、全力で応援させていただきたいと思っています。

福祉の人達が障害者の人達のことをよく知っていて、その人達のお手伝いをする形でビジネスを始めても、うまくいかないです。新しい感性とか新しいビジネスアイデアを形にするプロセスの中

で、障害を持っている人もない人も、その得意な所をうまく投入していくことで新しいビジネスを立ち上げていく、このベンチャーに皆さん方もチャレンジしていただくとうれしいと思います。

障害者に月給10万円払えるベンチャーのことを「福祉起業家」と名付けました。この人達はまだまだ少数派ですから、是非皆さんも将来、やるのがなくて困ったら、選択肢の1つにしてください。うちでは「福祉起業家経営塾」を創業当初からやっていて、経営のこと、ビジネスアイデアをビジネスプランにしていくこと、障害を持った人を雇用していく上では国の制度もありますので、それをどういうふうに使っていくかとかいうようなことを学んでいただきながら、自分達の夢をかなえていく、そのお手伝いをしております。

少しずつ増えてきていますが、まだ少ないです。普通にビジネスを起こすことですら大変なのに、一般的には保護の対象である障害者を雇用して、労働力とし戦力化していきながら事業を続けていくのは非常に難しい。儲からないし、メリットもない。それをなぜやるのというと、好きだからやっている、自分の生き方としてやっているという人達がほとんどです。

私自身、福祉施設でやっている仕事を見て、「月1万円の工賃はおかしい、やり方、仕組みの持ち方によって、月給10万円は出せるし、障害のある方の働く場はどんどん広がっていく」という思い込みから、「福祉ベンチャーパートナーズ（現在は株式会社FVPに社名変更）」という会社を2003年に起業しました。以来、福祉施設にコンサルティングを提供すると同時に、「障害者に月給10万円払えるベンチャーを作る」というミッションを旗印に、福祉起業家を育成していく活動をしています。

しかし、これは全部他人の土俵ですから、自分でも何かやろうというので始めたのがたい焼き屋です。調布方面にお住まいの方は、是非お立ち寄りください。京王線の西調布駅から7~8分歩いた所にある、「夢ある街のたいやき屋さん」という名前の、7坪ぐらいの小さな店です。ここでは障害者の方2名に働いてもらっています。（写真1参照）

たい焼き、今はやっていますね。はやる前から

やっていたのですが、こんなにはやるとは思いませんでした。私共のたい焼きは冷めてもおいしくて、本当は今日持ってくればよかったのですが、今度私共の会社に寄ってください。一緒に店に行きましょう。ご馳走します。

場所的にも決して一等地ではありません。3階建てアパートの1階です。右隣が中華料理屋で、左の暗くなっている所はケーキ屋さんです。実は調布では知る人ぞ知るケーキ屋と言われているのですが、知らない人は誰も知らない地味なケーキ屋で、その間で2年半商売させていただいています。（写真2参照）

実はたい焼き屋は2店舗やっています。もう1つはイオンモールという150万平米ぐらいの大きなショッピングセンターにテナントとして出ています。武蔵村山ってどこにあるか、知っているの方が少ないかもしれませんね。

ここでも障害のあるスタッフが2名、普通に働いています。普通の従業員通路から入って、同じように更衣して、同じようにタイムカードを打って、重度の障害の人も働いてくれています。

ということで、うちは事業を3つやっています。1つは福祉に対してのコンサルと研修の仕事、もう1つは障害者の働く会社を作りたい人達を応援する事業、そして3つ目は障害のある人もない人も共に働く、たい焼き屋の経営です。

会社には事業の目的がありまして、もちろん我が社にもあります。まず経営理念は、事業を通じて障害者の自立を支援し、社会に貢献する。そして全従業員とパートナーの物心両面の幸福を追求する。この2つが私達の会社の憲法で、この経営理念のもとに事業を展開しています。

私が創業者ですので、私の人生観やこれまでの経験から、こういう会社になりたいな、こういう会社として社会に存在したいなということを明文化したものが経営理念です。私達は株式会社ですので、事業を通じて障害のある方の主に経済的な自立、働く場を提供していくビジネスをやっていきたい。それで社会に貢献していきたい。さらに、一緒に働いてくれる従業員さん達に幸せを感じてもらえる会社でありたい。この従業員の中には私も入っています。私もこの仕事を通じて幸せになりたいし、「物心両面の幸福を追求する」というのは、経済的な幸福や安定と、仕事のやり甲斐や

生き甲斐を共に追求していきたいという思いで経営理念を作りました。

仕事をする上ではいろいろな価値観がありますので、それを否定する訳ではないけれども、私共の会社で仕事をしたい人達はこういう価値観を持っている人であってほしいというので、「仕事に対する価値観」というのも定めています。また、行動の物差しとして「行動指針」を作って、それを判断のよりどころにして仕事を進めています。経営理念に合致したことであれば、たい焼きも焼きますし、コンサルティングもやります。ただ、儲かるからといって、この理念に反することは一切やらない。これが私にとっても、スタッフにとっても、唯一無二の判断基準になっています。

この経営理念、仕事に対する価値観、行動指針がぴたっとく人には、やればやるほど仕事が面白い会社のようにです。NPOでは先が見えないし、金儲けだけの会社ではつまらない。ソーシャルベンチャーで社会的な意義があって、かつ株式会社という格好いいから、うちは今非常に人気があります。有名な大学を卒業した人達も就職したがつたし、実際そういう人が一時的に私共の会社で仕事をしたこともありましたが、経営理念と価値観の共有化ができなくて続かなかった人もいます。ですから、合う人にとっては非常にいいけれども、合わない人にはやりにくい会社だろうなと思います。

世の中にはいろいろな会社があります。皆さんがこれから社会に出ていくときに、大きな会社、成長している会社、有名な会社、新規事業をどんどん開発している会社などに目が向くかもしれませんが、それよりも、自分に合う会社、仕事をしていて楽しい、やり甲斐を感じるという会社で仕事をした方がいいと思います。しかし、大学を卒業した瞬間にそういう会社に巡り合えるとは限りませんので、どの会社で仕事をするかというよりも、自分は何の仕事をしたのか。失敗を重ねながら、何年かかかって見つけていけばいいのではないかなと私は思っています。

私共のたい焼き屋さんの仕事です。(写真3参照)

赤いユニフォームを着て、誰が障害者かという札も付けずにやっています。焼く仕事、レジの仕事、パッキングの仕事と、バックという生地作り

から具材の仕込み、洗い物などの仕事があります。

お好み焼という、キャベツとかマヨネーズが入ったたい焼きも売っていて、キャベツを切るのは結構大変な仕事で、それを全員でやっています。高校生のアルバイトさん達は、家で家事なんかやっていないから、キャベツをうまく切れない。それよりは障害のあるスタッフの方が何倍も早く切りますから、障害があると労働力として劣っていて、障害がないと労働力として優れているということでは決してないですね。

ですからうちでは、障害者の仕事はこれと決めるのではなくて、得意なことを得意な人がやって、苦手なことは得意な人が補う。お互いに補い合う形でやっています。また、障害のない人は自分の都合でアルバイトを休むことがあるのに対して、障害スタッフは絶対休まない。シフトに穴をあけないので、経営的には大変助かっています。うちみたいに障害スタッフが一緒に働いている店はまだまだ超レアケースですけれども、皆さんもこれからアルバイトする中で一緒に働いてみると、きっと面白いと思います。(写真4参照)

うちは小さな会社で、本社が神田と大手町の間にあります。もし興味があったら遊びにいらしてください。お昼ごはんぐらい、一緒にしましょう。スタッフは10人ぐらいしかおりません。たい焼きの店舗にも西調布とむさし村山と両方合わせて30人ぐらいで、全部で40人ぐらいしかいない、ただの民間中小零細企業です。

世の中にはいろいろおかしいじゃないかと思うことがあって、それを過去の先輩達はいろいろな形で問題を解決してきています。政治家になって法律を変えたり、市民運動をやってムーブメントを起こしたり、署名活動をしたり、方法はいろいろあります。うちはただの株式会社ですから、政治家や官僚になって法律を変えたりはできませんけれども、民間企業がができることも多々あると思っています。逆に行政や国やNPOなどではできない、民間企業にしかできないこともありますので、それを私達はやっていきたいと考えています。

障害者の人達は今全国で45万人ぐらいしか働いていません。雇用労働者として働ける年齢の障害者は360万人ですから、15%に達していない。

一般の人は、女性が出産で一時下がったりしますが、それをならしても6割ぐらいの人が何らかの形で働いています。それを社会参加と言うならば、障害者の社会参加は非常に低いわけです。

もちろん寝たきりの状態で介護・介助が必要な方に働けというのではなくて、働けるけれども、機会がなくて働けていない方がたくさんいらっしゃるのが現実です。それにはいろいろな事情があると思いますけれども、民間企業である我々が1人でも多くの方達を直接雇用することや福祉起業家を世の中に生み出していくことを通して、障害者が当たり前で働く世の中を作れるのではないかと。

実はマックやスタバでも障害者はたくさん働いていますし、ユニクロはほとんど全店に必ず1人は障害のある方が働いています。ほかにも障害者雇用をしている会社は増えつつありますので、皆さんが社会に出てお仕事をされていく中では、障害がある方と一緒に仕事をする機会が昔よりは増えてくる。今日大塚の話聞いていただいたのご縁に、できれば福祉起業家になっていただきたい。あるいは会社に入って障害のある方々と一緒にお仕事をするチャンスがあったら、彼らの得意なことってどういうことかなとか、積極的に関心を持って見ていただくだけでも世の中は変わっていく。就労率15%未満でたった45万人しか働いていないのが、10年後には100万人ぐらいが企業で働いているかもしれないと思うので、是非力を貸していただきたい。

当社の5年後のビジョンです。まず月1万円の工賃から脱却した事業所を100カ所作ろう。今20カ所ぐらいありますから、あと80カ所ぐらい作らなければいけない。2つめは福祉起業家を100人育てる。これも80人ぐらい育てなければならぬ。3つ目は、自社で障害者を50人雇用

する。今6名ですから、まだまだです。そして障害者が働くことは当たり前というカルチャーを作る。

今はまだ特別なことで、私のような仕事をしていると、ビジネスの世界では「立派なことをやっていますね」と褒められ、福祉の世界からは「株式会社で障害者を金儲けに利用している」と言われる。どちらから見ても異端です。異端ということは、逆に言うと必要なことなのだろうと思うのですが、ではどんな仕事をやっているかというのを30秒で話せない。プレゼンが下手なのかもしれませんが、それぐらい、業界のことだとか障害のある人が働くことの社会的な課題だとかいうことをみんなが知らなさ過ぎて、その辺の言語を補っていくと、少なくとも3分ぐらいは必要になってしまうわけです。

FVPという会社がやっていることが必要なくなってくるようになりたいな。ただの会社として存在し続けて、ただのたい焼き屋チェーンとしてメガフランチャイジーになったりすると面白いだろうな。自分がこの社会の中で存在していることを自分が誇りを持てるような仕事の仕方をしたいな。障害がある人達もない人も同じ願いなのだろうなと思うと、障害があるということその機会が十分に提供されていないことを、株式会社FVPが少しずつ解決していきたいなと思っています。

チラシを持ってきました。「福祉起業家経営塾」というのを作って、このようなチラシを配って一生懸命やっています。

福祉起業に興味がありそうな方がおられたら、ガイダンスは無料で、ウェブからも申し込みができますので、是非教えてあげてください。

とりとめもなくいろいろな話をしましたけれども、何かお役に立てれば幸いです。

ありがとうございました。

写真1

# 夢ある街のたいやき屋さん



写真2

# 一等地ではない立地条件です



目の前は生活道路  
車のお客様も多い！

もともとの一戸建てに住んでいる  
高齢の方とマンションに住む  
若い世代が混在している地域





## たい焼き屋さんの仕事



- 焼き  
たい焼きを焼く仕事



- レジ&パック  
お客様の注文を受け、袋につめる仕事  
お客様とのファーストコンタクトをとる重要ポジション！

## 障害のあるスタッフは全員戦力として働いています

